

狩野川放水路完成60周年記念事業

三輪 拓海

中部地方整備局 沼津河川国道事務所 流域治水課 (〒410-8567静岡県沼津市下香貫外原 3244-2)

昭和33年に狩野川台風は狩野川流域に未曾有の大被害をもたらした。この台風を契機として狩野川放水路の計画が見直され昭和40年に完成した。以後、狩野川本川の氾濫は発生しておらず、流域の安全・安心に大きく寄与している。近年の気候変動の影響等を踏まえ、狩野川流域では流域治水の取り組みが進展するとともに、河川整備基本方針及び河川整備計画が変更される等、治水事業は次のステップに進もうとしている。

令和7年度に放水路完成から60年の節目を迎え、治水事業のあり方や狩野川放水路の今後について改めて考えるとともに、流域の児童・生徒たちへの記憶の伝承と流域住民の防災意識向上を図るために実施した記念事業について沼津河川国道事務所における取組を報告する。

キーワード 狩野川放水路、流域治水、災害教訓の継承

1. はじめに

狩野川流域は往古より幾多の洪水被害が発生している。昭和23年9月の台風第21号（アイオン台風）では、床上浸水346戸、床下浸水222戸の浸水被害が生じた。さらに、昭和33年9月26日に伊豆半島に接近した狩野川台風は、狩野川流域に、死者・行方不明者853人、家屋の全壊・流出・半壊8,219戸という未曾有の被害をもたらした。

昭和24年に、従前より構想としてはあったものの実現には至らなかった放水路の開削を中心とした改修計画が立案され、昭和26年に放水路工事が着手された（写真-1）。計画分派量は当初1,000 m³/sであったが、工事途中の昭和33年9月狩野川台風による未曾有の出水に伴い大幅な計画の変更が行われ、基準地点大仁における計画高水流量を4,000 m³/s、狩野川放水路への分派量を2,000 m³/sに見直し、昭和40年に放水路が完成した。

以後、築堤、護岸等の整備、排水機場の整備等が行われた結果、狩野川本川の氾濫は発生しておらず、これら

治水事業は、流域の安全・安心に大きく寄与している。

狩野川水系においては、平成12年に河川整備基本方針を、平成17年に狩野川水系河川整備計画を策定（平成28年変更）し、これに基づき、狩野川の特性と流域内の風土・文化等の実情に応じた河川整備を推進してきた。しかしながら、近年の気候変動の影響に伴う降雨量の増大等への対応が求められていることから、令和5年に狩野川水系河川整備基本方針を変更した。本変更においては、大仁地点での計画高水流量を4,600 m³/s、放水路の改築により分派量を3,400 m³/sとし、放水路より下流の本川河道への配分流量を低減する方針とした。これを受け、狩野川水系河川整備計画も令和8年に変更した。

本稿では、狩野川放水路完成60周年記念事業（以降、記念事業と称する）の企画検討と実施結果を整理し、その効果と流域住民の防災意識の向上について報告する。

2. 検討体制・内容

(1) 狩野川台風の記憶をつなぐ会の概要

a) 会の目的と構成機関

狩野川流域に未曾有の被害をもたらした狩野川台風の記憶を未来へ語り伝え、次世代に引継ぎ防災意識の向上に資することを目的に、平成26年に狩野川台風の記憶をつなぐ会（以降、つなぐ会と称する）が設立された。当時の被害の大きさや恐ろしさを「学び」、被災者の体験を若者に「伝え」、当時の記憶を「集める」活動を行っている。

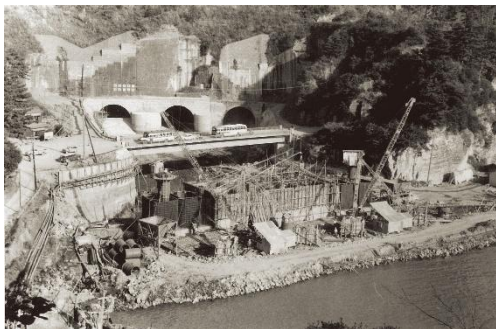


写真-1 建設現場のモノクロ写真（口野トンネル）

静岡県沼津土木事務所、沼津市、三島市、伊豆市、伊豆の国市、函南町、清水町、長泉町、狩野川漁業協同組合、狩野川倶楽部、狩野川資料館ガイドボランティア、水晶山の会、国土交通省中部地方整備局沼津河川国道事務所の13の機関である（表-1）。

b) 活動内容

つなぐ会では、これまで狩野川台風や狩野川放水路に関する記憶をつなぐための事業として、狩野川台風に関する写真、映像、音声、文献等を収集し、狩野川流域の様々な地域で「学ぶ」・「伝える」・「集める」をテーマとした活動を進めている（図-1）。具体的には、狩野川流域の学校における「防災・河川環境教育」の支援や、狩野川台風 60 年、狩野川放水路完成 50 周年、60 周年に関するシンポジウムの開催等があげられる。

(2) 作業部会、本会議の運営

つなぐ会では、活動内容の総合的な企画立案・活動に係る実務の遂行を行うための「作業部会」と活動方針・内容に関する決定・承認を行うための「本会」を開催している。

記念事業においてもつなぐ会が主導し、令和5年度～

表-1 狩野川台風の記憶をつなぐ会 構成機関

No.	機関名
1	静岡県 沼津土木事務所
2	沼津市
3	三島市
4	伊豆市
5	伊豆の国市
6	函南町
7	清水町
8	長泉町
9	狩野川漁業協同組合
10	狩野川倶楽部
11	狩野川資料館ガイドボランティア
12	水晶山の会
13	沼津河川国道事務所



図-1 狩野川台風の記憶をつなぐ会 活動内容

令和7年度にかけて作業部会及び本会を開催し、狩野川放水路完成60周年記念シンポジウム（以降、シンポジウムと称する）の実施方針や企画内容について協議した。

国・県・市町・地域団体によって構成されるつなぐ会が主体となって実施した本記念事業では、多主体の連携によって多方面からの流域全体に対する取り組みが可能となった。

(3) 防災・河川環境教育について

平成28年度につなぐ会が中心となり狩野川流域の小学校・教育委員会と行政関係者から構成される「狩野川流域防災・河川環境教育検討会」を設立した。従来の出前講座が職員による単発的な講義であるのに対し、防災・河川環境教育はつなぐ会にて作成した実践ガイドという教材を用いて、小学校教員が授業の中で継続的に指導をするという取組である。

防災・河川環境教育のモデル校・実践協力校は令和7年度時点で狩野川流域内25校にのぼり、各校に向けてカスタマイズした学習教材や指導計画によって小学生の狩野川に関する防災学習を支援している（図-2）。

3. 企画

つなぐ会は、記念事業としてシンポジウムの開催のほか、特設ホームページの開設、巡回パネル展の実施等の関連事業を行った。

本記念事業では、シンポジウム等による「狩野川流域での治水事業への理解を深める取り組み」と、巡回パネル展等の関連事業による「認知を拡大する取り組み」の



図-2 防災・河川環境教育モデル校・実践協力校の位置図

2つで構成することで流域全体の防災意識向上を図った。

(1) 狩野川放水路完成60周年記念シンポジウム

令和7年8月23日に開催したシンポジウムでは、ロゴマーク表彰等の「60周年記念に関する企画」と小学生による防災の取り組み発表や防災教育OB・OGインタビュー等の「防災・河川環境教育に関する企画」を連動することで、世代横断的な事業に取り組んだ。

a) プログラム案の検討

狩野川放水路完成60周年の節目において、流域の児童・生徒への記憶の継承及び親世代を含む流域住民の防災意識向上を目的としたプログラムを検討した。小学生の保護者から建設業界関係者まで多様な主体の人が参加する一方で、それぞれの主体が持つ興味関心が異なると想定された。そのため、防災教育に関連するプログラムによる第1部、狩野川放水路完成60周年に関連するプログラムによる第2部の2部構成とし、各主体の興味関心に合ったプログラムに参加できるよう工夫した。

つなぐ会の活動の大きな特徴である「防災教育」に焦点を当てた第1部では、流域の幅広い関係者にどんな学びをしているのかを知ってもらうため、「小学生による防災の取り組み発表」、「防災教育OB・OGインタビュー」、「パネルディスカッション」の3つのプログラム構成による発表を実施した。

b) 小学生による防災の取り組み発表

狩野川流域の上流・中流・下流に位置する3つの小学校からそれぞれの学校の立地条件等の特徴に応じた授業の成果発表が行われた。各校の発表テーマは、各校で実施されている防災・河川環境教育の学習内容に沿って各校によって決定された。上流に位置する伊豆市立熊坂小学校の発表テーマは、「熊坂小学校の私たちにできること」、中流に位置する伊豆の国市立長岡南小学校の発表テーマは、「狩野川博士になろう～狩野川と共に生きる～」、下流に位置する沼津市立大平小学校の発表テーマは、「水害からわたしたちのくらしを守るために」であった（写真-2）。

c) 防災教育OB・OGインタビュー

防災教育OB・OGインタビューは、防災・河川環境教

育に取り組み始めて約10年経過した現在、かつて防災・河川環境教育を学習した生徒が当時の学習内容を振り返り、防災教育の効果や今後防災教育を受ける児童に対するメッセージを発信した。

インタビュー対象の防災教育OB・OGは、伊豆市立熊坂小学校の卒業生で、シンポジウム当時高校1年生であった11名（シンポジウム当日の登壇者は10名）の生徒である。インタビュアーは、当時の防災・河川環境教育の担当の先生であった杉山宏次氏（現熱海市立多賀小学校校長）が務めた。

防災教育OB・OGと当時の防災教育担当の先生に対して事前打合せを実施し、授業内容の振り返りや記憶に残っていることの打合せ（写真-3）やアンケート調査から、「当時の防災教育で心に残っていること」、「今、自分が思う防災教育の大切さ」、「後輩のみなさんへメッセージ」の3つの観点に基づき本インタビューを実施した。

d) パネルディスカッション

流域治水プロジェクトを進行する中で、幅広い流域関係者に対して、狩野川流域における水害リスクを踏まえた上で、いま自分たちや地域で行っていることを継続して実施すること、流域治水の考えに基づく連携や治水対策等の重要性を訴求することを目的としてパネルディスカッションを実施した。テーマは、「水害に強いまちづくり～地域や自分たちができること～」とし、静岡新聞社 東部総局 編集部の松岡部長によるコーディネートによって進行了た。

パネリストには、学識経験者（リスクコミュニケーション）の視点から名城大学の柄谷教授、教育関係者の視点から前出の杉山先生、地域関係者の視点から伊豆の国市消防団の荻野消防団長、治水行政の視点から沼津河川国道事務所 藤浪事務所に登壇いただき 作業部会において決定されたパネルディスカッションのテーマ及び話題に基づき、議論を展開した（表-2）。

また、会場参加者にパネルディスカッションの内容を自分事として理解していただくため、コーディネーターから会場参加者に問いかけを行い、会場参加者は手元の3色の色紙を用いて回答する形式を採用した（写真-4）。



写真-2 小学生による防災の取り組み発表の様子



写真-3 防災教育OB・OGインタビュー事前打合せの様子

(2) 関連事業

関連事業として特設ホームページ開設，巡回パネル展，ロゴマーク募集，配付物作成，記念冊子とりまとめ等を実施した。

記念事業において「狩野川流域での治水事業への理解を深める取り組み」と「認知を拡大する取り組み」の2つの取り組みを実施しており、巡回パネル展等の関連事業は認知の拡大を目的とした取り組みである。これらの2つの取り組みを組み合わせることで、広がりと深さの両面から防災意識への働きかけを行った。

a) 特設ホームページ開設

記念事業の一環としてつなぐ会の特設ホームページを開設した。開設に向けて令和5年度から令和7年度のつなぐ会 作業部会において構成案の検討を行った。特設ホームページでは、記念事業・シンポジウムに関する告知、狩野川台風アーカイブ及び防災教育に関連するコンテンツの更新を行った（図-3）。

記念事業・シンポジウムに関する告知においては、
「狩野川放水路完成60周年記念ロゴマーク（以降、ロゴ
マークと称する）」の募集及び結果、巡回パネル展の実
施、シンポジウムの開催等をアナウンスした。

狩野川台風アーカイブ及び防災教育に関連するコンテンツは、狩野川資料館に収蔵されている資料をアップロードした「デジタル写真館」、狩野川台風に関する語り部へのインタビュー動画に関する「動画チャンネル」、狩野川放水路内をバーチャル空間上で探索することができるコンテンツ「狩野川放水路バーチャルツアー」を公

表-2 パネルディスカッションのテーマおよび話題

項目	内容
テーマ	水害に強いまちづくり～地域や自分たちができること～
話題1	近年の狩野川流域における水害リスクを踏まえた流域治水の取り組み
話題2	地域や自分たちによる事前の備え
話題3	水害に強いまちづくりに向けた今後の展望



写真4 パネルディスカッションの様子

開した。

b) 巡回パネル展

シンポジウムのプレイベントとして、狩野川放水路の概要・効果や、計画変更の契機となった狩野川台風の被害等を流域住民に周知し、防災意識を啓発することを目的として、令和7年2月3日から令和7年7月31日にかけて流域内9箇所で開催した（写真-5）。

より多くの人が集まり、多くの人の目に触れることができる展示場所について事務局にて検討し、つなぐ会作業部会にて協議しスケジュール・場所を決定した。

c) ロゴマーク募集

狩野川台風の記憶をつなぐ会特設ホームページにてロゴマークの募集を告知し、令和6年4月1日から令和6年9月30日にかけて募集を行った。事務局にて事前審査を行ったうえで、令和6年度第2回つなぐ会 作業部会にて投票を行い採用作品を選出した（図-4）。

232件の応募作品の中から静岡県伊豆の国市在住の中学生の作品が選出され、シンポジウムにて表彰式を行った(写真-6)。

採用されたロゴマークは、記念事業における配付物や広報資料、パネル、記念冊子等に掲載し、様々な場面で「狩野川放水路完成60周年」の周知に活用した。

d) 配付物作成



図-3 狩野川台風の記憶をつなぐ会 特設ホームページ



写真-5 巡回パネル展の様子（三島市）

「狩野川放水路」・「完成から60周年」について周知し、多くの人の目に触れ、記憶に残すことを目的に、缶バッジとダムカードを模して独自で作成した放水路カードを作成し、シンポジウムにて配付した。

缶バッジは、グレー、ピンク、グリーン、ブルーの4種類を作成し、プログラムやチラシ等と共にシンポジウムの配付物としてランダムに1つ配付した（図-5）。

放水路カードも、シンポジウムにて配付した。また、シンポジウム終了後から令和8年3月31日にかけて狩野川資料館において希望者に対して配付した（図-6）。

e) 記念冊子とりまとめ

狩野川流域に未曾有の被害をもたらした狩野川台風等の狩野川放水路の建設の背景や、狩野川放水路50周年記念シンポジウムが開催された10年前から変わってきた治水に対する考え方や流域内における取り組み等を周知すること、「流域治水」を主眼に置いた水害対策や河川整備等への理解促進を図ることを目的に、狩野川放水路完

成60周年を記念した記念冊子を作成した（図-7）。

令和5年度から令和7年度 つなぐ会 作業部会にて記念冊子のタイトル及び構成について協議を行った。タイトルは、「完成から60年を迎えた狩野川放水路～流域のこれまでとこれから～」である。

4. 実施結果

(1) シンポジウム来場者アンケート調査の実施・分析

シンポジウムの参加者に対して、シンポジウムの満足度や、シンポジウムを通じた防災意識の変化、狩野川流域の今後の取り組みに関する意見について調査することを目的として、アンケート調査を実施し、その結果を分析した。

今回のシンポジウムを通じた水害に対する防災意識の変化について、「とても高まった」が35.3%、「高まった」が59.7%で、合わせて95.0%が防災意識が高まったと回答した（図-8）。さらに、今後の狩野川流域に対する取り組みに期待することについて、70.7%が「狩野川流域の子どもたちに対する防災・河川環境教育をこれからも継続してほしい」、64.7%が「気候変動に対応するための治水事業を進めてほしい」と回答した。

アンケート調査からシンポジウム参加者の水害に対する意識が高まっており、防災・河川環境教育や治水対策の推進に期待を持っていることが分かった（図-9）。このことから、シンポジウムの目的である「記憶の伝承と



図4 狩野川放水路完成60周年記念ロゴマーク



写真6 ロゴマーク表彰の様子



図5 缶バッジの表面イラスト



図6 放水路カード（60周年記念バージョン）



図7 狩野川放水路完成60周年記念冊子

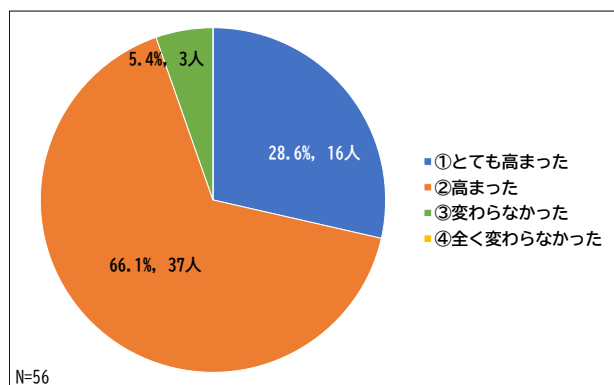


図-8 問 6（水害に対する意識の変化）の回答結果
「防災意識の向上」が達成できたと推察できる。

(2) 関連事業における結果

a) 狩野川資料館の見学者数

シンポジウム開催年と前年度・前々年度の狩野川資料館の見学者数を比較し、記念事業による狩野川放水路及び狩野川流域の治水事業に対する関心の高まりを推察した。なお、記念事業による来訪者数の増減を純粹に推定するため、学校行事の一環等の来訪者を除いて検討することとし、個人申し込み者を対象とした。

狩野川資料館の個人来訪者は、令和5年度は220人、令和6年度は222人であったのに対して、シンポジウム等の記念事業を実施した令和7年度は254人に増加した。例年の来訪者数から約13.4%増加しており、記念事業によって狩野川放水路及び狩野川流域の治水事業に対する関心が高まっていると推察することができる。

b) 狩野川水系河川整備計画 パブリックコメント・住民説明会時の質問内容

狩野川水系河川整備計画の変更に伴い、パブリックコメントを令和8年2月12日～令和8年3月13日にかけて募集した。また、住民説明会を令和8年2月25日に伊豆の国市、令和8年2月26日に沼津市で開催した。パブリックコメント及び住民説明会におけるご意見の内、水害リスクに対する治水事業に関するご意見が約47.6%であった。

前回（平成28年）の狩野川水系河川整備計画の変更時に実施したパブリックコメントでは、水害リスクに対する治水事業に関するご意見が約25.0%であったことと比較すると、水害リスクに対する認知が広がるとともに、狩野川流域の治水事業に関して住民の関心が高まっていることが推察できる。

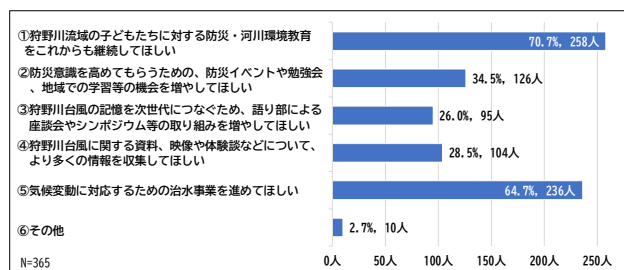


図-9 問 7（今後の狩野川流域に対する取り組みに期待すること）の回答結果

(3) 考察

シンポジウムや関連事業といった狩野川放水路完成60周年記念事業の実施によって、狩野川放水路や狩野川流域の治水事業について流域住民に対して訴求することができた。

記念事業の結果、流域住民に対して防災意識の向上に寄与するとともに、防災・河川環境教育の重要性の周知及び治水事業の理解を深めることに繋がったと推察できる。

また、シンポジウム運営に関しては内容・テーマ・時間配分・投影資料の視認性等に改善の余地が確認された。今後のシンポジウム等のイベント開催に向け、本記念事業で得られた知見を活用できると考えられる。

また、本取組は、狩野川流域治水協議会の「自分事化に向けた取組計画」に掲載されていることを併せて報告する。

5. おわりに

つなぐ会の活動をはじめとする、狩野川流域における「つなぐ」取り組みを継続して実施していく。防災・河川環境教育の継続と更なる発展に取り組み、児童・生徒からの流域住民への幅広い展開を通して、狩野川台風の記憶及び狩野川放水路の歴史を次世代に引き継ぎ、更なる防災意識向上に流域全体で取り組んでいく。

謝辞：本論文を作成するにあたり、沼津河川国道事務所の職員の方をはじめ、日本工営株式会社様等、各種ご助言を頂きました関係者の皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。